

編集を終えて

皆さんに書いていただいていた本当によかった。それが今の実感である。

書ける 때가来たのだとも思う。20年目、30年目と21回卒の年次会をを持ってきたけれど、西穂高岳独標への登山という話は、今回がはじめてである。ようやく西穂に関わる私たち共有のトラウマがほぐれてきているのではないかな。

書いていただいた文章から少し引いてみる。

17～18歳の少年から青年期に移る世代には、精神的に微妙に影響していた。…私も心には何か得体の知れないどんよりとした重苦しさを感じていた。

事故の生き残りとして個人的には、喪失感と虚無感を心のどこかに抱き続けています…

8月1日は自分自身の「生」を見つめる日でもある。

こうした気分の根拠は次のような言葉に表されている。

「なぜ私が生き残ってしまったのか」

こうした想念は、あの時山上にいたもののみでなく、翌日登山に向かうはずだったものや、行きたいと思っていたけれどクラブ活動などの事情で参加を断念した者たちをも含んで、皆が同様に共有するものである。だから、次のような情動につながる。

独標では自然に涙が出てきた。

カタルシスを経て、次のような言葉が発せられる。

長年の心のつかえがとれ、少し軽くなりました。

4年前から独標に登ることにした。昔のことを思い出したり、今年はこんなことがあった、来年はこうしよう、などいろいろなことを考えながら、一步一步独標への道をたどることで、11人の仲間との対話を楽しんでいるこのごろの私である。

みんなで登ることができたことが、こうした感情の共有を実現した。そしてそのことは、これからの我々の生にとって、さらにしっかりした足がかりを作ってくれたように思う。卒業40年は、まだまだ我々にとって、中間点である。

写真は、百瀬修平さん、白木建太郎さん他からいただいた。新聞資料は、小林俊樹先生、大西健文さん、伊藤芳郎さんから提供していただいた。二木計臣さんの遺稿を提供していただき、また、改めて綴っていただいた小林俊樹先生、小松芳郎先生に感謝し、編集を終えたい。

(文責 鈴岡晋一)